

八戸は明治期に市制施行した弘前や青森に比べ、だ  
いぶ遅れをとった。八戸市  
の誕生は、1929（昭和  
4）年5月1日、八戸町・

小中野町・湊町・鮫村の4  
町村が、八戸の発展を港に  
託して合併したことに始ま  
る。以後、八戸市は港とと  
もに成長することになる。

八戸市第

2代市長の

神田重雄は、  
八戸市の生  
は東北の救済と振興を意図

みの親である。と同時に八  
戸港の拡大・発展に生涯を  
捧げた人物でもある。  
神田は昭和戦前中期に  
長く市長を務めた。彼の市  
政のもとで、大規模な埋立  
がなされ、3000トン岸  
壁を含む商港の建設が始め  
られた。  
折から東北地方は昭和農  
村恐慌の被害に遭い、政府

して東北振興政策を立ち上  
げた。神田市長は、この機  
会を利用して政府に八戸港  
の重要性を訴え、開発の促  
進を要請している。  
神田市長は、さらに青森  
県内の世論も取り入れ、八  
戸港を中心とした遠大な構  
想を打ち立てた。八戸港を  
東北地方の最重要港に位置  
づけ、八戸市と秋田県の土  
崎を結ぶ横断鉄道を主張し  
たのである。  
太平洋と日本海を結ぶ横  
断鉄道の、当時「青秋鉄道」  
と呼ばれた。結局は実現し  
なかった鉄道だが、193  
6（昭和11）年2月1日に  
国立公園となった十和田湖  
を経由させるなど、夢のあ  
る大きな構想だった。

## 八戸市の誕生と発展

中 園 裕

（文化振興課県史編さんグループ）



1 昭和戦中期の三日町通り  
（県史編さんグループ所蔵）。  
2 現在の三日町通り。2004（平成16）年  
11月13日、宮本利行撮影。

八戸港の経済的な基盤を  
作ったのは、1921（大  
正10）年5月に操業を開始  
した日の出セメント工場で  
ある。後に警城セメントに  
合併されるが、この工場に  
よって八戸港は経済的基盤  
を確立した。警城セメント  
は現在、八戸セメントとし  
て営業を続けている。

八戸市も最近では中心街の  
空洞化が目立つが、まだま  
だ三日町通りは八戸市の中  
心地としてにぎわいを見せ  
ている（写真2）。近年は  
屋台村なども作られるなど、  
市民の間で新たな街作りが  
熱心に行われている。  
なお、この写真は『青森  
県史資料編近現代4』にも  
掲載した。